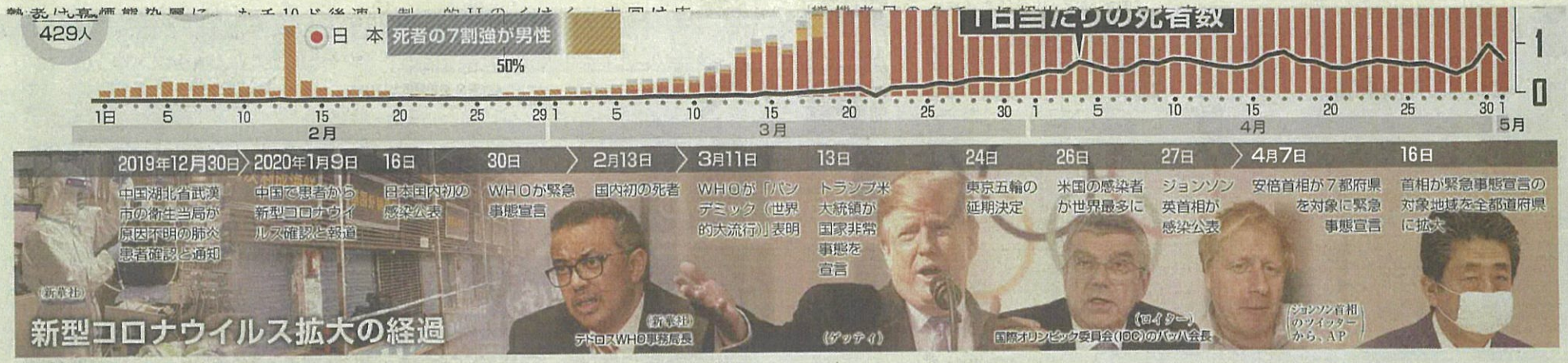

大型評論

「新型コロナと文明」

連帯深めるＩＴ利用を

山本 太郎 長崎大熱帯医学研究所教授

やまもと・たろう　1964年広島県竹原市生まれ。長崎大卒。医師、医学博士。専門は国際保健学、熱帯感染症学。京都大医学研究科助教授、外務省国際協力局課長補佐などを経て現職。アフリカ各国や中米ハイチで感染症対策に従事。著書に「感染症と文明」（岩波新書）など。

感染症が歴史の変化を加速

歴史を振り返れば、私たち人間は、幾度ものパンデミック（世界的大流行）を経験してきた。14世紀ヨーロッパで流行した黒死病（ペスト）や、コロンブスの新大陸再発見後の16世紀アメリカ大陸に広がった旧大陸の感染症。1918～19年に世界を席巻したスペイン風邪（インフルエンザ）などである。

そうした感染症は、私たちの社会をどのように変えてきたのだろうか。

14世紀にヨーロッパで流行したペストは、最終的に欧州全土を覆い、ヨーロッパ人口の4分の1から3分の1を奪う被害をもたらした。その様子は、イタリアの作家ボッカッチオの「デカメロン（十日物語）」に詳しい。作品には、ペストにあえぐ当時の社会状況が色濃く反映されている。

「一日千人以上も罹病しました。看病してくれる人もなく、何ら手当てを加えることもないので、皆果敢なく死んで行きました」（野上素一訳、岩波文庫）

半世紀にわたるペスト流行の後、ヨーロッパはある意味で静謐で平和な時間を迎えた。それが内面的な思索を深めさせたという歴史家もいる。そうした中で、ヨーロッパはイタリアを中心にルネサンスを迎え、文化的復興を遂げる。

ペスト以前と以降を比較すれば、ヨーロッパ社会は全く異なった社会へと変貌し、強力な主権国家を形成した。「神の怒り」と考えられた疫病に対して、何ら有効な手段を持ち得なかった教会の権威は失墜し、感染者を隔離できる力を持つ国家に権力の主体が移っていった。中世は終焉を迎え、ヨーロッパは近代を迎えた。

これがペスト後の欧州世界であった。そして変貌したヨーロッパは、アフリカや新大陸へと踏み出していく。それが新たな悲劇の幕開けともなる。

◇　◇

コロンブスによる再発見以降の16世紀南北アメリカは、感染症によって大きな影響を受けた。天然痘や麻疹（はしか）といった、新大陸にはなく旧大陸にのみ存在した感染症の広範かつ急激な流行の後に出現した社会は、それまで現地の人々が暮らしてきた社会とは異なる、スペイン人を中心とする別世界となった。

カナダ出身の歴史学者ウィリアム・マクニール氏は著書「疾病と世界史」で、新大陸の住民も疫病を「神の怒り」と解釈しており、その「神の怒り」が免疫のない新大陸住民に鉄鎚を振り下ろしたにもかかわらず、スペイン人の感染は少なく「神の恩寵」を受けているように見えたと指摘した上で、以下のように述べている。

「聖なる理法も自然の秩序も、はっきりと原住民の伝統と信仰を非としている以上、抵抗ということにどんな根拠が残っていたと言うのか。スペインの征服事業が異常なほどの容易さだったこと、またわずか数百人の男が広大な地域と数百万の人間をがっちりと支配し得た事実は、このように考えてきて初めて理解できる」（佐々木昭夫訳、中公文庫）

◇　◇

パンデミック後に時として出現する新たな社会は、独立した事象として現れるわけではなく、歴史の流れの中で起こる変化を加速する形で表出される。14世紀のペスト流行の時も、16世紀南北アメリカでの感染症流行の時もそうだった。

さらに言えば、20世紀のスペイン風邪流行もそうだったと思う。流行後の世界は、新興国アメリカの世界史の舞台における台頭を見た。アメリカは、その後、世界の政治や経済の中心となっていく。

新型コロナウイルス感染症の世界的大流行も、社会に何らかの影響を与えるだろう。そうした影響の胎動は既に始まっている。それがどのような変化を社会にもたらすか、現段階では分からない。ただ、そうした変化は、流行が終息した後でさえ長く続く。

14世紀ヨーロッパのペスト流行の時のように、アンシャンレジーム（旧秩序）に変革を迫るものになるかもしれない。14世紀のペストが社会の主体を教会から国家へと変えたように、今般の流行がＩＴ（情報技術）などを主体とする社会の出現をもたらすかもしれない。

その兆候はある。ＩＴが監視国家ではなく、民主主義的合意によって連帯を深めるものとして用いられる社会であればよいと思うし、そうでなくてはならないと信じている。

3月18日、ドイツのメルケル首相は、今回の新型コロナウイルス感染症の対策とその理解に向け、演説を行った。彼女は旅行や移動の自由に対する制限とその必要性に触れ、次のように述べた。

「開かれた民主主義に必要なことは、政治的決断を透明にし、説明すること、私たちの行動の根拠をできる限り示して、それを伝達することで、理解を得られるようにすることだ」

その上で、基本的人権の制限は「絶対的に必要な場合のみ正当化される」もので、「民主主義社会において決して軽々しく、一時的であっても決められるべきではない」と、その痛みと例外性を強調した。（林フーゼル美佳子訳、サイト「Ｍｉｋａｋｏドイツ語サービス」）

旅行や移動の自由が厳しく制限された旧東ドイツ出身で、そうした自由が苦労して勝ち取られた権利であることを誰よりも知る、彼女ならではの言葉であった。少なくとも私は、そのことに自覚的でありたい。

感染症は社会の在り方がその様相を規定し、流行した感染症は時に社会変革の先駆けとなる。そうした意味で、感染症の世界的流行は極めて社会的なものとなる。

歴史が示す一つの教訓かもしれない。

ただし、希望はある。それは私たちの心の持ちようにある。

（随時掲載します）

紙面編集・石丸喜代治